

江戸のふるさと、岡崎

この時二十五歳、徳川家康になる



制作：神戸 峰男 撮影：山崎 兼慈

この像は、平成 30 年度末に、名鉄「東岡崎駅」北東エリアに設置が予定されているものです。

目次

1. 江戸のふるさと、岡崎

はじめに

岡崎 100 周年・家康公検定にあたって

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

- 1 源氏・足利一門と西三河
源頼朝と瀧山寺
足利一門の西三河進出
- 2 松平氏の岡崎進出と西三河支配
松平親氏と松平郷
三代信光の岩津進出と西三河支配
四代親忠による伊賀八幡宮、大樹寺建立
七代清康の岡崎進出とその遺産
- 3 家康公生誕の時代

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

- 1 家康公の一生
 1. 誕生 / 泰平への祈り
 2. 駿府 / 学びの人間形成
 3. 立志自立 / 岡崎の10年
 4. 浜松 / 艱難辛苦と躍進
 5. 離伏 / 秀吉の下で
 6. 関ヶ原 / 決断の時
 7. 將軍宣下 / 平和社会への布石
 8. 元和偃武 / 悲願果てなく
- 2 岡崎における家康公
平和社会への立志
織田信長との同盟が「愛知の三英傑」を生んだ
三河一向一揆は家臣団の再編と結束を生んだ
戦国大名「徳川家康」誕生

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

- 1 「元和偃武」の意味とそのカタチ
「武家諸法度」に見る武士のあり方と善政の奨励
「禁中並公家諸法度」に見る天皇・公家との関係 ～その意味と意義
- 2 平和社会のもたらした「豊かさ」のカタチ
100年で3倍に！～人口増加と農業の発達
大消費地江戸を支えた商業と流通の構図
本の出版と教育・文化の発展 ～増えた人々の楽しみ
本当に国を閉ざしていたのか ～江戸時代の対外政策の「四つの窓口」
豊かで美しい江戸文化のカタチ
- 3 「江戸」と「三河」～その深い関係のカタチ
江戸の町づくりと三河武士たち
江戸に移った三河商人たちの足跡 ～多くの「三河屋」
江戸で好まれた「三河の物産」
- 4 全国に広がった三河武士たちの町づくり
- 5 主な三河武士たちの生誕地

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

- 1 主な古戦場
小豆坂古戦場 大樹寺の陣 三河一向一揆
- 2 家康公に関わる主な寺社
- 3 江戸時代の岡崎遺産
ビスタライン 菅生神社花火大会
藤川の旧東海道と宿場町 岡崎の城下町と宿場町
- 4 家康公に関わる岡崎市の親善都市、ゆかりの町

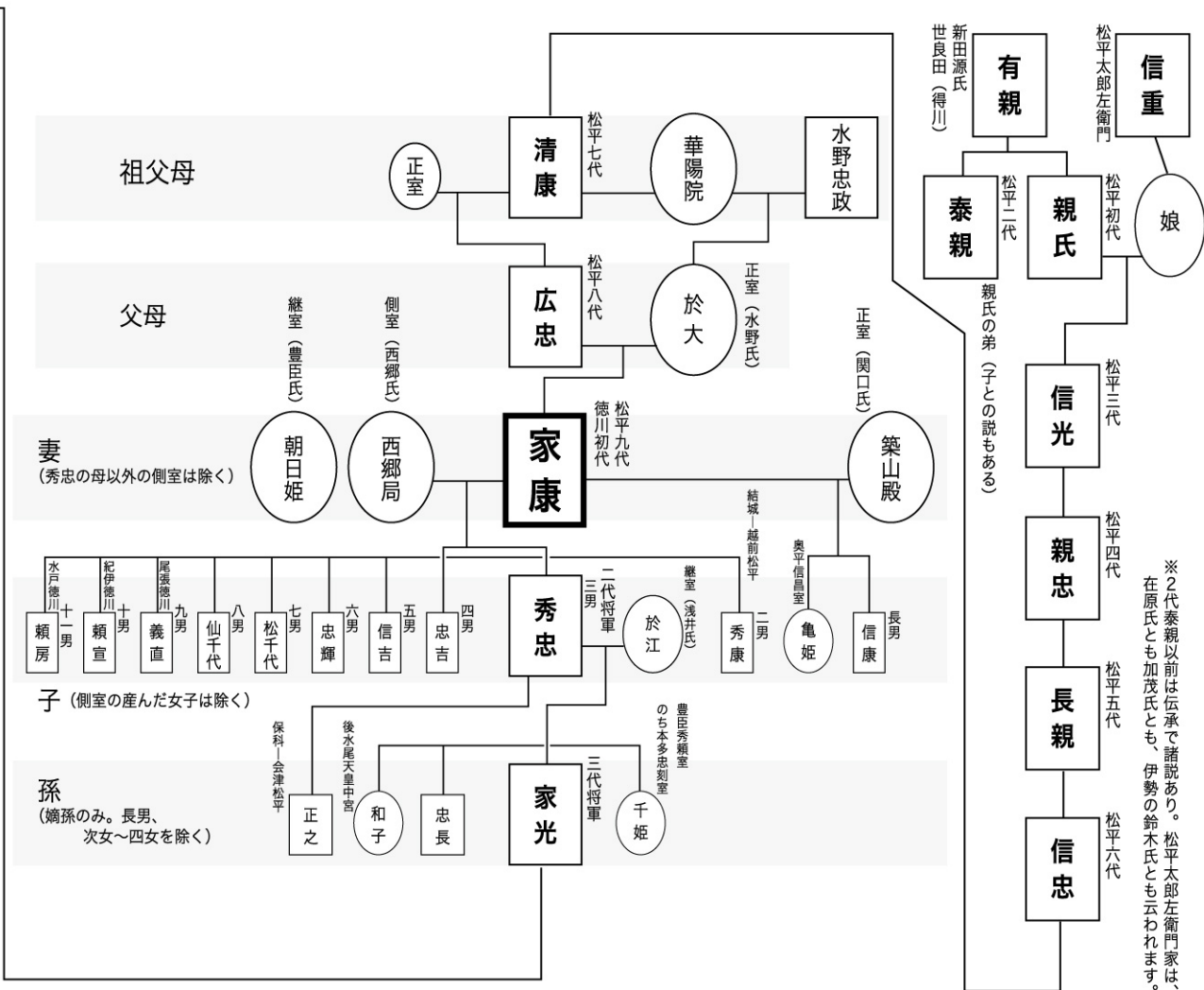
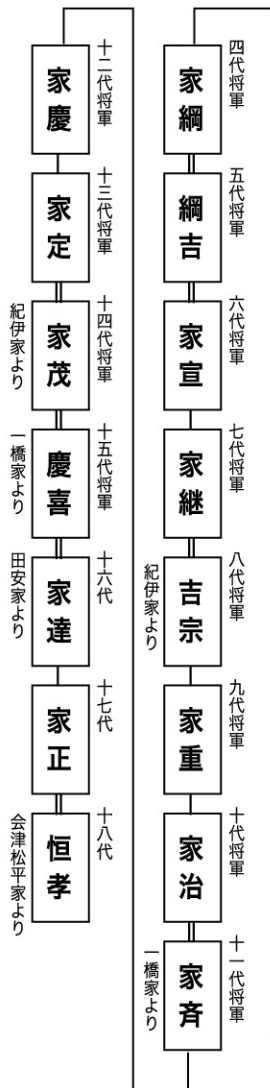
6. 家康公生誕のまち、岡崎

おわりに

- 1 家康公に学ぶ
- 2 家康公検定ファイナル まとめ

家康公を取り巻く家系図

松平初代から徳川十八代まで＜概略版＞



※2代泰親以前は伝承で諸説あり。松平太郎左衛門家は、在原氏とも加茂氏とも、伊勢の鈴木氏とも云われます。

1. 江戸のふるさと、岡崎

はじめに

平成 28 年 (2016)、岡崎は市制施行 100 年です。

昨年、徳川家康公こうきよ薨去 400 年けんしやうを顕彰し、市内外に広く深く「家康公の岡崎」が浸透しんとうしてゆきました。その上に立つて節目ふしめの今、あるべきこのまちのカタチや使命を求めつつ本年度の「家康公検定」に向かいます。

検定テーマは、「江戸のふるさと、岡崎 ～ 家康公生誕のまち」。

ここを源流に細河が大河となって大海に流れゆき、戦国乱世に一筋の平和への流れを通して泰平たいへい「江戸日本」を生んでゆく歳月がありました。

「江戸日本」の源流の誇りをもって、岡崎にて最後の検定に臨みます。

日本に武家政権の世が確立してゆく時、東西の要のこの地に人材萌芽の根が張り、時代が動き、人が動き、三河の英傑えいけつたちが各地に転戦し根付いてゆきました。鎌倉幕府にも室町幕府にも、三河が関わります。

やがて政権が揺らぎ、応仁元年 (1467)、応仁の乱から世は乱れます。

三河山中から松平一族が立ち、七代 清康きよやすは岡崎城を拠点に三河を統一。しかし難に遭遇そうごうし、八代 広忠ひろただもまた不遇の中、織田、今川に翻弄ほんろうされる戦国の、その時。

応仁から 75 年後、天文 11 年 (1542)12 月 26 日、岡崎城に産声うぶこえが響きました。

結束の一族一統、三河武士たちが望みを託した後の徳川家康公こと、竹千代誕生。それは「泰平への産声であつた」と、

家康公四百年祭で語られました。

この時、この地から歩み出した家康公 75 年の生涯しょうがいは、後に「重き荷おを負うて・・・」の遺訓いくんに遺る深い生き方。「天下は天下の天下・・・」の遺言ゆいごんに語る高德こうとくの志。

家康公の全生涯に学べば、幼少、青年、壮年、その時どきを深く生き、老熟してゆく人間成長の道のりから悲願の泰平「江戸日本」が開かれてゆきました。

前半、人質不遇ひとじちふぐうの時を抜け出し、念願の「岡崎に帰る」を実現。岡崎城に立ち、三河一国を統一して祖父 清康の偉業に近づいた時、勅許を得て先祖に繋がる「徳川」を復姓。「徳川家康」となり覚悟の人生を歩き出しました。

永禄 9 年 (1566)12 月、25 歳。

この時ここから 50 年の生涯行路が「江戸日本」の泰平を開きました。

徳川の平和、パクス・トクガワーナと言われる世界未曾有の平和社会。それは、戦いの無い世を実現した政治、経済のカタチ、暮らしに活きる協同、質実、循環などの安心感をもち、今日、私たちが求める美しく持続可能な人間社会のあり方に示唆を与えるものです。

その時代、社会、生き方に学ぶ名言、格言。この社会を築いた人たち、支えた人たち、各地に足跡を残した人たちがいて、「江戸日本」がありました。

その根っこは岡崎。今の私たちの暮らしと共にあり、この風土にあります。

「江戸のふるさと、岡崎」を守ること、探ること、創つくることは、これからの日本のため、世界のため、この町の使命です。

岡崎市制 100 年は、「江戸のふるさと、岡崎」が歩きはじめる時です。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

1 源氏・足利一門と西三河

《源頼朝と瀧山寺》

瀧山寺（岡崎市滝町）には源頼朝と等身大の聖観音像が安置され、さらに頼朝の歯と髭が埋め込まれています。

源頼朝の実母は、熱田大宮司 藤原季範の娘で、頼朝は熱田神宮内の屋敷で誕生したと言われています。現在でも生誕地碑が建てられています（誓願寺 / 名古屋市熱田区）。祖父に当たる藤原季範には熱田大宮司とは別に「額田冠者」という称号が付されていました。これは額田を領する者という意味です。頼朝の母方は額田（現在の岡崎市の中央部から東部および額田郡幸田町地域）に領地を所有していました。この縁から額田第一の修験道場でもあった瀧山寺には頼朝と縁続きの僧がいました。母の兄弟、頼朝にとっては叔父にあたる祐範は、頼朝が平清盛によって伊豆に流された時、従者を付け金銭面での援助もしたと伝えられています。頼朝は、後に幕府を鎌倉に開くと、この矢作川を中心とする西三河地方を軍事的な重要地域と捉え「関東御分国」に、実弟の源範頼を三河国守護に任じたのです。

頼朝はさらに従弟の瀧山寺の寛伝を関東の一大霊場、日光山満願寺の座主に推挙、大きな地位を与えました。寛伝は瀧山寺に住職として戻った後もその恩を忘れることはなく、頼朝が亡くなると寺内に惣持禅院を建立し、京の仏師である運慶・湛慶に頼朝を偲んだ「聖観音立像」を、脇仏として「梵天」「帝釈天」（いずれも国重文）を製作させました。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

《足利一門の西三河進出》

『太平記』の中に、少数の軍勢で鎌倉を発った足利尊氏が、三河国矢作の館で足利一門を糾合し大軍勢となって京に向かう場面が出てきます。結果、元弘3年（1333）、後醍醐天皇のもとで鎌倉の北条政権を倒すことになるのですが、この「矢作の館」こそ岡崎の地を意味しています。

時代が遡ること110年ほど前、承久3年（1221）に勃発した承久の乱を抑えるため、京に向かったのが幕府の執事であった足利義氏でした。尊氏より5代前の先祖です。義氏は軍功を挙げ三河国守護に任ぜられました。この時一門を三河国に呼び寄せ主に矢作川流域に配置しました。一門衆はそれぞれの地名を名字に変え、細川、仁木（岡崎市細川町、仁木町）、吉良、今川、一色（西尾市吉良町、今川町、一色町）などの、後の大名たちが誕生したのです。さらに足利氏の被官衆も大門や額田山間部（共に岡崎市）に定住し、この地域の在地領主として勢力を持つようになりました。後に大門の八剱神社境内地に足利尊氏石宝塔が建てられた所以でしょう。また、家康公の「見返りの大杉伝説」の残る天恩寺（岡崎市片寄町）も尊氏の発願により足利三代将軍義満によって建立されています。

源氏による鎌倉政権も、そして足利政権もこの岡崎の地に大きくかかわっていたのです。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

2 松平氏の岡崎進出と西三河支配

《松平親氏と松平郷》

『松平由緒書』には初代 親氏が松平郷（豊田市松平町）に入った時の様子が詳細に記されています。親氏は諸国を行脚していた時宗の僧といわれ、名を徳阿弥と称していました。後に松平郷の在地領主である太郎左衛門家に養子に入り松平親氏と名乗るようになりました。親氏の出自については諸説がありますが、江戸時代の諸史料には、新田一族世良田徳川氏の末裔とされています。

親氏は松平郷をよく治め、道を造成したり橋を架けたりしながら次第に勢力を拡大してゆきました。

親氏は、義父 信重が創建した松平郷の寂靜寺を改修し、本尊に阿弥陀如来像を寄進、「高月院」と改め、松平氏の菩提寺としました。

また奥州塩竈六所大明神（宮城県塩釜市）を勧請、六所神社を創建しました。塩竈神社は奥州平泉 藤原氏の崇敬が篤く、多くの関東武士たちからも崇敬を集めていました。親氏がわざわざ塩竈大明神を勧請したのもこのような背景からではなかったかと考えられます。また、家康公幼少時の手習いの場として知られる本宿の法蔵寺（岡崎市本宿町）も親氏がその菩提寺としたいと伝わり、矢作の光明寺（岡崎市矢作町）には親氏の位牌が残ります。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

《三代信光の岩津進出と西三河支配》

松平宗家三代目の信光は、初代 親氏の二男に当たります。信光は叔父であり二代目の泰親とともに、松平郷から岩津（岡崎市岩津町）に進出をしました。当時、岩津には中根大膳という豪族がいましたが、信光はそれを破り新たに岩津城を築城します。

永享 9 年（1437）、二代目の泰親が死去すると、跡を継いだ信光は岩津城の周囲に七つの城を築き、親族を城主として岡崎北部地域の支配権を強めました（岩津七城）。そして、およそ 10 年後には岩津城域内に信光明寺を建立します。信光は本堂として「釈迦堂」（当時は本堂、現在は観音堂 / 国重文）を建て天皇の祈願所としました。

その後、寛正 6 年（1465）に西三河各地で吉良氏の被官たちによる一揆が勃発すると、守護代の西郷氏に代わってそれらを鎮圧しその存在感を大いに示しました。信光は子供たちを西三河各地に分封し、松平一門の支配権を強めたのです。そして京都で応仁元年（1467）、応仁の乱が起けると全国各地で争乱が起きるようになり、信光もその機に乗じて西三河の重要な拠点である安城城（安城市）を攻略し、そしてさらに守護代 西郷頼嗣の岡崎城（明大寺城）にも迫ったのです。頼嗣は信光の六男 光重を養子に迎えることで岡崎城を明け渡し、ここに岡崎松平氏が誕生しました。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

《四代親忠による伊賀八幡宮、大樹寺の建立》

信光が死去した 1488 年ころ、安城城主となった親忠は、それより以前は大樹寺の近辺（鴨田郷）に館を構えていたのではないかと考えられています。応仁元年（1467）に加茂郡の豪族らが岡崎に侵攻をした際、惣領家であった岩津松平親長が京都にいたこともあり、親忠が一族を糾合してこれを破りました（第一次井田野合戦）。以後、親忠の求心力は高まり、宗家としての地位を確立したのではないかと考えられています。

親忠は一族の氏神であり祈願所として文明 2 年（1470）に伊賀八幡宮を創建しました。以来、松平家・徳川家の戦勝祈願所として崇敬され続けます。また 5 年後には、一族の菩提寺として大樹寺を創建します。開基は勢誓愚底上人。「大樹」というのは、「將軍」を意味する中国の言葉で、勢誓上人によって命名されました。

明応 2 年（1493）には、中条氏を始めとする加茂郡の豪族たちが再び岡崎侵攻を図りますが（第二次井田野合戦）、親忠はこれを破り、その後に隠居して家督を長男の長親（五代）に譲りました。



三代信光建立の
信光明寺観音堂（国重文）

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

《七代清康の岡崎進出とその遺産》

親忠以来、松平宗家は安城松平家が継いでいきますが、七代 清康は若くして岡崎への進出を試みました。大永 4 年（1524）、清康は大久保忠茂の献策により、宗家に従わない岡崎松平信貞の支城である山中城を攻め落とし岡崎に進出しました。この功により大久保忠茂は岡崎城下の市の徴税権を得、税を無くすことで諸国から商人を集め、松平家の新しい城下町の発展を図りました。これにより現在の連尺通りに市が開かれ、後の岡崎の中心商店街に繋がってゆきます。このときを「岡崎開府」とも「岡崎開市」とも呼んでいます。

また、岡崎の「六所神社」（岡崎市明大寺町）もこのころに松平郷から勧請されたと考えられています。

享祿 3 年（1530）正月、20 歳になった清康は「是の字」を左手に握っている夢を見ました。その意味を「是＝日下人＝天下人を掌中にした」と解した龍溪院の摸外和尚を、「龍海院」を建立して呼び寄せました。清康はこの時より精力的に三河統一に乗り出しほぼ制圧に成功します。そして天文 4 年（1535）、菩提寺の大樹寺に多宝塔（国重文）を建立すると、尾張への進出を開始した清康でしたが、守山（名古屋市守山区）の陣中で家臣に誤って殺害されてしまいます。清康の夢は儚くも頓挫し、松平一門も再び分裂を始めてしまいました（守山崩れ）。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

3 家康公生誕の時代

七代 清康が殺害され、跡を継いだのはまだ 10 歳の^{ひろただ}広忠^{のぶ}でした。予てより宗家の座を狙っていた^{さくらい}安城桜井^{のぶ}の松平信定は岡崎城に入り、^{あべさだよし}広忠は家臣の阿部定吉^{ともな}に伴われて城を脱出、^{ろろう}流浪の身になってしまったのです。2 年後、駿府の^{いまがわよしもと}今川義元の後援を得た^{きかん}広忠は、岡崎城内で^{かき}帰還を画策^{さく}していた大久保忠俊や林藤助らの働きもあり、岡崎城主として復帰することができました。

この頃の岡崎は尾張の織田氏と駿河の今川氏の勢力圏争いの中心にあり、松平一門も分裂の様相を呈していました。^{かりや}広忠は同じく今川方であった刈谷城主 ^{みずのただまさ}水野忠政の娘・^{おだい}於大と結婚、縁戚関係を結ぶことによって尾張の織田信秀をけん制したのですが、天文 11 年（1542）の夏、織田軍と今川・松平連合軍は^{あずきざか}小豆坂（岡崎市羽根町）で^{しょうとつ}衝突します（第一次小豆坂合戦）。

このような混乱の中、12 月 26 日早晩（^{そうぎやう とら}寅の年、寅の日、寅の刻）、岡崎城で元気な男の子が誕生しました。後の徳川家康公です。応仁の乱が勃発してから丁度 75 年目、正に 150 年の戦国の真ただ中に家康公は誕生しました。この^{りゅうじん}時、龍神伝説や、^{しんだらたいしやう}真達羅大将の化身伝説などが語り継がれたのは、平和を請い願う人々の思いの表れだったのだでしょう。この年、織田^{のぶなが}信長は 9 歳、^{ひでよし}秀吉はまだ 6 歳、甲斐の武田^{かい}信玄は 22 歳、越後の上杉^{うえすぎけんしん}謙信は 13 歳、正に戦国の世が動き始めた時代でした。

2. この風土

徳川家康公生誕の地—その歴史的な土壌

《家康公生誕の物語》



真達羅大将（鳳来寺薬師堂） 伝通院像（楞嚴寺蔵／刈谷市）

天文 11 年 12 月 26 日、寅の刻、家康公生誕のその時、母於大（伝通院）が祈りを捧げた三河国鳳来寺薬師堂から^{とら}寅年の守護神 真達羅大将の像が消えました。



岡崎城 龍神伝説の井戸「龍ヶ井」

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

1 家康公の一生

年齢	西暦（元号）	主な出来事
1	1541（天文10）	三河刈谷城主 水野忠政の娘 於大は三河岡崎城主 松平八代 広忠に嫁ぎ、乱世を収める子を授かるよう鳳来寺薬師堂に参詣する。
2	1542（天文11）	広忠の長男として12月26日誕生。幼名 竹千代。
3	1544（天文13）	松平家と共に今川方だった水野家が、代替わりで織田方となり、父 広忠は母 於大を離縁。祖父 清康の妹 お久に養育される。
6	1547（天文16）	今川家の人質として駿府に向かう途中、田原城主 戸田康光の裏切りで尾張の織田信秀（信長の父）の人質となる。
8	1549（天文18）	父 広忠が暗殺される。今川軍が織田方の安城城を攻略、城主の織田信広（信秀の子）を捕らえ竹千代と人質交換。竹千代は改めて今川家の人質として駿府へ。

① 誕生 / 泰平への祈り

応仁の乱勃発より75年、戦国150年の真つ只中にあたる天文11年（1542）、徳川家康公が岡崎城で誕生しました。この翌年には、鉄砲が初めて日本に伝わり、さらに7年後にはキリスト教も伝わります。世は正に無秩序の戦国乱世、人々の泰平への願いは強く、家康公生誕の際には本丸の井戸から金鱗の龍が天に立ち昇った、などの出生伝説が語り継がれました。

竹千代（家康公の幼名）は、3歳で母と離別した後に織田家、今川家と人質生活を繰り返します。その間に父 広忠も失い、想像もできないような多難な幼年期を送りました。ただ、この原体験が、より「岡崎への思い」を強くし、後年、「伊賀越え」のような苦境に立たされた時にも、「岡崎へ帰る」という強い思いが彼を支え続けたのでしょう。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
14	1555（弘治1）	祖母 源応尼（華陽院 於大の母）の養育と今川家重臣 太原雪斎の薫陶を受け元服。松平次郎三郎元信を名乗る。
15	1556（弘治2）	父の墓参で岡崎に。今川の支配に耐え、自分の帰還を待ちわびる家臣らの松平家再興への悲願を知る。
16	1557（弘治3）	今川の一族 関口義広の娘 瀬名（後の築山殿）と結婚。
17	1558（永禄1）	初陣。織田側の三河寺部城を攻める。祖父 清康の武名にあやかり元信から元康に改名。
18	1559（永禄2）	長男 信康誕生。竹千代と名付ける。
19	1560（永禄3）	桶狭間の合戦。先陣で尾張大高城への兵糧入れを成功させるも、大将の今川義元が織田信長に討たれる。

② 駿府 / 学びの人間形成

駿府に送られた竹千代は、駿府へ赴いた祖母の源応尼の養育を受け、すくすくと屈託のない元気な少年に成長します。側近の鳥居元忠に対し「百舌鳥を鷹のようにせよ」と無理難題を命じ、できなかった元忠を縁側から突き落としたとの逸話もそのような様子をよく表しています。また今川義元の師でもあった太原雪斎の教育を受けますが、ここでは儒教を基にした教えや、兵法なども学んだと伝えられ、家康公の人間形成に大きな役割を果たしました。一般的には冷遇が想像される人質生活ですが、むしろ次代の今川の武将として大切に育てられていた様子もうかがえます。

14歳で元服を果たした竹千代は、義元の「元」の一字を与えられ名を「元信」に、更に義元の姪（後の築山殿）を正室に迎えるなど、義元の恩恵や期待の中で戦国武将としての成長を遂げていったのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
19	1560（永禄3）	今川軍が桶狭間で敗れ岡崎 大樹寺に退却。住職の登誉上人に諭され立志。戦国乱世の収束と泰平社会の構築を目指す。
21	1562（永禄5）	織田信長と対等の軍事同盟（清洲同盟）を結ぶ。
22	1563（永禄6）	元康から家康に改名。三河一向一揆が勃発（翌年、和議）。
24	1565（永禄8）	三河三奉行を置き、民政の充実を図る。
25	1566（永禄9）	三河一国を平定、朝廷から従五位下 三河守に任じられ、先祖の新田世良田氏から連なる徳川復姓を許され、徳川家康 誕生。
26	1567（永禄10）	長男 信康が織田信長の娘 徳姫と結婚。
27	1568（永禄11）	甲斐の武田信玄の駿河侵攻に合わせ、今川領の遠江に侵攻。
28	1569（永禄12）	今川氏真が降伏、三河・遠江の二ヶ国を領有。

③ 立志自立 / 岡崎の10年

桶狭間おけはざまの合戦で今川義元が織田信長に敗れると、元康は松平家の菩提寺 大樹寺に入り、先祖の墓前で自決をしようとします。その時に住職の登誉上人から戦国武将としての戦う意味を説かれ、「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を授けられました。元康 19 歳、平和への志を立てたのです。

岡崎城主となった元康は、三河の平定に着手します。伝説の源氏の棟梁 源 義家の一字を受け、決意も新たに「家康」と改名し、家臣団が二分されて戦った三河一向一揆の危機を乗り越え、祖父 清康以来の念願でもあった三河統一を成し遂げました。永禄 9 年（1566）、従五位下三河守を勅許された家康公は、先祖である「徳川」に姓を改め、ここに戦国大名 徳川家康が誕生したのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
29	1570（元亀1）	岡崎城を信康に譲り、遠江 浜松城に居城を移す。近江 姉川の戦いで、織田・徳川連合軍が浅井・朝倉連合軍を破る。
31	1572（元亀3）	三方ヶ原の戦いで武田信玄に惨敗。短慮を反省「しかみ像」を描かせる。※翌年、陣中で武田信玄病没。
34	1575（天正3）	織田・徳川連合軍が三河 長篠・設楽原の合戦で武田勝頼に大勝。
38	1579（天正7）	側室 西郷の局が三男 秀忠を産産。信長の命で長男 信康 切腹、妻 築山殿 死罪。
41	1582（天正10）	武田氏滅亡。信長より駿河を与えられ3ヶ国の大名に。本能寺の変で信長死去。堺（大阪府）より「伊賀越え」で岡崎へ。武田遺領の甲斐・信濃を攻略（天正壬午の乱）、五ヶ国大名となる。

④ 浜松 / 艱難辛苦と躍進

戦国大名として自立を遂げた家康公は、遠江に進出。戦国大名としての今川氏を滅ぼし、居城を岡崎から曳馬に移し、地名を浜松と改めました。以降、戦国最強を謳われた武田家との 12 年に及ぶ苦しい戦いが始まります。特に三方ヶ原の合戦では、家臣の諫言を聞かず大敗したことで、自らの戒めとして「しかみ像」を描かせました。その後、岡崎に置いた長男の信康と正室の築山殿を武田との内通を疑われ失うなど、家康公にとっては厳しい試練が続きます。信長が勢力を伸長する中で正に堪忍することの大切さを体得していったのでしょう。その信長も家臣の明智光秀の謀反により京の本能寺で無念の最後を遂げます。

「岡崎へ帰らん」。信長の招きで上方遊覧中の家康公一行は、泉州 堺で本能寺の変を知るや急ぎょ脱出、苦難の伊賀越えを断行し岡崎に帰ることができました。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
43	1584（天正 12）	織田信雄の要請に応じ、小牧・長久手で羽柴秀吉と合戦。和睦の証に二男の於義丸（後の秀康）を秀吉の養子に。
45	1586（天正 14）	関白となり豊臣姓を賜った秀吉の妹 朝日姫を継室に迎え義弟に。秀吉の母 大政所が岡崎に下り遂に家康公上洛、秀吉に臣従する。五ヶ国経営のため、浜松城より駿府城に居城を移す。
49	1590（天正 18）	秀吉の小田原攻めに出陣、北条氏降伏。北条氏の領国であった関東に国替え（江戸討ち入り）、8月1日（八朔）江戸城に入城する。
51	1592（文禄 1）	朝鮮出兵（文禄の役）。渡海は免れ、肥前 名護屋城に在陣。
52	1593（文禄 2）	儒学者の藤原惺窩から「貞観政要」を受講、治世を学ぶ。
55	1596（慶長 1）	山科言経から「吾妻鏡」の講義を受け武家政治を学ぶ。

⑤ 信長 / 秀吉の下で

信長の弔い合戦（山崎の戦い）で明智勢を破り、後継者を定める清洲会議を制して台頭した秀吉との直接対決、「小牧・長久手の戦い」が勃発します。家康公は信長の遺児である二男 信雄を助けての戦いで局地戦で勝利を得ましたが、信雄の単独講和により戦いの大義名分を失くし、和睦します。

この後、家康公は秀吉に謁見し臣従を余儀なくされますが、大きな合戦を行うこともなくなり徳川の力を蓄えることになります。戦国武将にとって力を蓄えるということは、武力そのものは当然ですが、何よりも領国経営を充実させ、人々の暮らしを豊かにすることこそが大切な要件でした。家康公の五ヶ国（三河・遠江・駿河・甲斐・信濃）経営と、北条氏滅亡後に移封された関東の経営は、後の泰平国家の建設に向けて大切な試金石となったのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
57	1598（慶長 3）	秀吉死去（享年 63 歳）。朝鮮からの即時撤兵を命ずる。
58	1599（慶長 4）	京都 伏見で日本初の本格的な木版活字出版（伏見版）開始。
59	1600（慶長 5）	オランダ船リーフデ号が九州豊後に漂着、ウィリアム・アダマスとヤン・ヨーステンを外交顧問として召し抱える。 上洛に応じない会津の上杉景勝征伐（会津征伐）に赴く途中、反家康派の石田三成らが挙兵し、鳥居元忠らが守る伏見城陥落。小山（栃木県）会議で福島正則ら豊臣恩顧の大名が味方となる。関ヶ原の合戦（岐阜県）。三成らの西軍に勝利する。三男 秀忠率いる徳川本隊は上田城で真田昌幸に足止めされ遅参。
60	1601（慶長 6）	五街道整備（宿駅と伝馬制度、一里塚の設置等）で流通円滑化。

⑥ 関ヶ原 / 決断の時

秀吉の死後、内大臣（内府）に任じられていた家康公は、五大老の筆頭格として豊臣政権の運営を担います。しかし、これを快く思わない石田三成ら奉行衆との対立が浮き彫りになり、一度は平和になったはずの社会に再び暗雲が立ち込め始めたのです。このような中でも家康公は国産貨幣の鑄造に着手したり、木版による出版を行うなど、新しい時代に向けた政策を進めていました。しかし、豊臣政権の存続を願う三成らによって、家康公排除の動きが活発になり、遂に関ヶ原の合戦が引き起こされます。

合戦が長引き、再び戦乱の時代に逆行することを避けた家康公は、反三成派の豊臣家臣たちを糾合し、一挙に勝敗を決する戦いを決断しました。多くの死傷者を出しましたが、勝敗は一日で決し、家康公による脱戦国に向けた取り組みが加速されてゆきます。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
62	1603（慶長 8）	伏見城にて後陽成天皇より征夷大將軍に任じられ江戸に幕府を開く。 孫娘 千姫を大坂城の豊臣秀頼（秀吉の遺児）に嫁がせる。
64	1605（慶長 10）	伏見城で朝鮮使節と会見し、朝鮮出兵（文禄・慶長の役）で関係が悪化していた朝鮮と善隣友好の和議を結ぶ。 藤原惺窩の弟子の林 羅山（儒者・朱子学者）を登用する。 將軍職を2年で秀忠に譲る。將軍職は徳川家の世襲であることを示し、世の安定を図る。
66	1607（慶長 12）	駿府城に移り、大御所政治開始。第1回朝鮮通信使が来日。 臨済宗の僧 金地院崇伝と林 羅山に命じ、日本初の銅活字による出版（駿河版）を開始、文治国家を目指す。

⑦ 將軍宣下 / 平和社会への布石

関ヶ原の合戦後、慶長 8 年（1603）、家康公は征夷大將軍の宣下を受け、遂に天下人となります。しかし天下の権を掌握することは、家康公にとって最終的な目的ではなく、平和社会建設のための手段であったのでしょうか。家康公の本当の戦いはここから始まったとも言えます。

二年後には、朝鮮出兵で関係が断絶されていた朝鮮国の使節・松雲大師と会談、閉塞的な外交関係を打破し、東南アジアに向けても広く貿易を推進しました。さらに、新しい時代の武士のあり方を求めて朱子学を奨励し、文治国家の基盤を追求します。

そして秀忠に將軍職を譲ると、慶長 2 年（1607）、江戸城より修築なった駿府城に移ります。幕府政治は江戸の將軍に任せ、家康公は「大御所」として一歩引いた高みから、平和社会構築のプランを描いていたのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯一ふるさと岡崎

年齢	西暦（元号）	主な出来事
70	1611（慶長 16）	二条城で秀頼と対面、両家の衝突を避け、関係改善を図る。
73	1614（慶長 19）	方広寺鐘銘事件。幕府に対抗する豊臣家との「大坂冬の陣」勃発。
74	1615（慶長 20）	「大坂夏の陣」で秀頼と母 淀殿自害、豊臣家滅亡。 一国一城令を発令。 1615（元和 1） 年号を元和に改め、武をやめ平和の始まりを意味する「元和偃武」を宣言する。 「武家諸法度」「禁中並に公家諸法度」「寺社諸法度」制定。
75	1616（元和 2）	4月17日、駿府城で薨去。遺言により久能山に埋葬される。
—	1617（元和 3）	天海僧正の働きかけにより朝廷より東照大権現の神号を受ける。 日光に改葬、日本の恒久平和の守り神となる。

⑧ 元和偃武 / 悲願果てなく

「これが最後の戦い」と心を決した家康公は、74 歳という高齢を押して「大坂の陣」に挑みました。結果、秀頼と淀の方は自決し豊臣氏は滅びます。すべての戦いの火種を消し去り、遂に若き日の志を成し遂げた家康公は、年号を元和と改め、ここに「元和偃武」を宣言します。「応仁の乱」以来およそ 150 年、ようやく戦国時代が終わりを迎えました。そして翌年、時代の大転換をもたらした家康公は、駿府城で息を引き取ります。

一周忌の後、家康公に東照大権現の神号が贈られました。そして日光に東照宮を建て神として祀られたのです。死してなお国家の平和を見届ける、そんな家康公の果てない悲願が、いま世界中から注目されています。そしてその原点の地が、岡崎なのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

2 岡崎における家康公

《平和社会への立志》

永禄^{えいりく}3年(1560)は家康公の生涯にとって最も大きな転機を迎えた年でした。駿河の太守 今川義元が桶狭間の合戦で無念の最期を遂げると、足掛け12年に及ぶ駿府での人質生活から抜け出し、父祖の地 岡崎に帰ることができたのです。ただそれは簡単なことではなく、大樹寺の先祖の墓前で自決まで考えた末のことでした。時の住職であった登誉上人によって「生きる意味」「戦う意味^{さく}」を諭され、「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を自分自身の志として受け止めることができたのです。家康公、19歳。

(※「厭離穢土 欣求浄土」については他のいくつかの説がありますが、ここでは桶狭間合戦後の説としています)

やがて、「厭離穢土 欣求浄土」の旗印^{はたじるし}のもと、天下平定の大望を成し遂げた後も、真の平和社会を実現するまで、命懸けで天命^{まこと}を全うしたのです。

「江戸のふるさと、岡崎」の入り口^{りし}に、この立志の時があることを忘れてはならないでしょう。



登誉上人像(大樹寺蔵)

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

《織田信長との同盟が「愛知の三英傑」を生んだ》

家康公が岡崎城主として自立を果たそうとした時に、そのもっとも大きな力となったのが尾張の織田信長との同盟です。清洲城で結ばれたこの同盟は、対等の立場で協力し合うという内容でした。信長に従属^{じゅうぞく}を強いられたものだという考えもありますが、「築山信康事件」のようにいくつかの不幸があったにしろ、信長は西に向かい家康公は東に向かうという不可侵^{ふかしん}的な内容は守られ続けたのです。秀吉は信長の家臣でしたから相乗り^{あいの}をする格好にはなりませんが、後に天下人と呼ばれる3人がすべて愛知から輩出^{はいしゅつ}された原点はこの同盟にあったと考えて良いでしょう。



織田信長肖像
(三宝寺/天童市)



徳川家康木像
(等持院蔵/京都市)

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

《三河一向一揆は家臣団の再編と結束を生んだ》

家康公の天下平定事業に欠かせないのが、最後まで忠義を貫く三河武士たちの活躍です。そんな三河武士たちも初めから結束力があったとは言えませんでした。松平氏の攻防を見てみると、彼らもよく分裂していた様子が分かります。家康公が松平家の当主として岡崎城に戻ってから大変な危機が訪れました。それが「三河一向一揆」です。主君か仏か、浄土真宗の門徒でもあった家臣たちが二分して争うことになってしまったのです。佐々木の上宮寺・針崎の勝鬘寺・野寺の本證寺の三河三ヶ寺を中心として勃発した一揆は、反家康派の武将や一門衆が一揆方に付いたことで西三河一円に広がってしまいましたが、家康公側が優勢になると、門徒側の武士たちに厭戦気分が広がり、およそ半年で終結しました。これは和議の条件で門徒武士たちを家康公が赦免したからだと考えられます。結果、家康公は三河武士団の再編に乗り出し、整った軍事組織（三備の制）を作ることになりました。

戦国乱世の時代の武士たちは、何よりも自分たちに安心を与えてくれる優れたリーダーにこそ、忠義を示し結束もできたのです。そして家康公と深い信頼関係にあった三河武士たちは江戸平和社会創造の担い手ともなっていくのです。

3. 家康公の岡崎

家康公の生涯—ふるさと岡崎

《戦国大名「徳川家康」誕生》

三河一向一揆を乗り越え、三河一国を平定した家康公は、「徳川」への復姓と「三河守」への叙任を朝廷に正式に願い出て、勅許を得ます。永禄9年（1566）12月29日、従五位下三河守に任じられ、祖先が名乗っていたとされる源氏の一族、新田世良田徳川姓に改めました。その時、家康公25歳。戦国大名 徳川家康の誕生です。

人質時代に仕えた駿河・遠江・三河の太守 今川義元と同じ三河守に任じられたことにより、家康公は名実ともに三河国の大名として認められたことを内外に示し、次の新たなステージに向かうことになります。

これから50年の生涯が、人間 徳川家康公を形成し、江戸日本を築きました。「江戸のふるさと、岡崎」を考える時、“大樹寺における立志”と、“戦国大名 徳川家康誕生”のこの時こそが、その原点にあたることを忘れてはならないでしょう。

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

1 「元和偃武」の意味とそのカタチ

《「武家諸法度」に見る武士のあり方と善政の奨励》

大坂夏の陣終結後に元号を「元和」と改め、ここから本
当の平和な時代が始まるという家康公の並々ならぬ決意を
示した「元和偃武」。「武家諸法度」は武士たちの守るべき
具体的な内容を定めたもので、主に次のようなことが記さ
れています。

一、文武弓馬ノ道、専ら相嗜ムベキ事

新しい平和な時代の武士のあり方は「文」と「武」の両立
であるということを示しています。

一、知行所務清廉ニコレヲ沙汰シ、非法致サズ、国郡衰弊
セシムベカラザル事。

一、道路・駅馬・舟梁等断絶無ク、往還ノ停滞ヲ致サシム
ベカラザル事。

武家諸法度の主な目的が「領民への善政」であったこと
がうかがえます。武士たちに、決して非法をすることなく、
正しい政治を行うように求めています。これこそが新しい
平和な時代を担う武士たちへの厳しい要求だったのです。

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《「禁中並公家諸法度」に見る天皇・公家との関係 ～その意味と意義》

これは幕府が天皇及び公家に対する関係を確立するため
に定めたもので、「禁中」とは天皇のことを意味します。こ
の法令も武家諸法度と同様に金地院崇伝によって起草され
ました。

一、天子諸藝能之事、第一御學問也。不學則不明古道

第一条冒頭の部分では、天皇の文化的な活動の第一は学
問と定めています。曆をはじめ日本古来の様々な文化や仕
来りなどの伝授・継承のためです。武家（幕府）の政に対し、
朝廷が別の命令を発したりすることで政治を混乱させるこ
とがないようにしたいという意図が見えています。これは
現代の天皇に対する憲法の規定にも似た所があり、非常に
重要です。

公家諸法度には一般に言われるような、天皇や公家たち
の行動を制限したような内容はほとんど見当たりません。
日本の古来からの天皇制の中で如何に平和のカタチを創っ
ていくのか、武家政権との関わりをどうするのか、家康公
の哲学が生かされています。

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

2 平和社会のもたらした「豊かさ」のカタチ

《100 年で3 倍に！ ～人口増加と農業の発達》

慶長3年(1600)の人口を当時の全国の石高から類推すると、およそ1200万人程度と考えられています。家康公が天下を収めて100年余り、江戸時代の享保6年(1721)の人口については、幕府の指示で細かな調査が実施されました。その時の人口がおよそ3100万人、100年余りで3倍近く増加していることが分かります(社会工学研究所資料より)。

このことは単に戦が無くなったからという捉えだけではなく、飛躍的な農業生産力の向上が考えられます。大規模な治水工事が各地で行われ、またそれに伴う新田開発も盛んに行われました。特に利根川流域の関東平野では、江戸の町づくりと並行して河川の付け替えや治水工事が行われ、その多くを手掛けた関東代官頭伊奈忠次は現代でも各地で顕彰されています。



賑わう大伝馬町
(江戸東京博物館)

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《大消費地江戸を支えた商業と流通の構図》

家康公関東移封時(1590年)の江戸は、江戸城大手門から東にかけて茅葺きの町屋が100軒あるかないかと伝えられ(『聞見集』)、城下町を割り付ける場所は10町(約0.1km²)ほどの広さだったと伝えられています(『岩淵夜話』)。ところが寛永年間(1624～1645年)に入ると町全体の広さも大きく拡張され、人口も30万人程度まで増加していたのではないかと考えられています。さらに江戸中期には100万都市へと発展し、当時世界一の大都市として発達した様子がうかがえます。

これは江戸の町割りを進める過程で、特に流通を考えた水路や街道の整備が行われ、人口のみならず、全国からより多くの商品が流入するシステムが出来上がったからだと考えられます。五街道の起点となる江戸日本橋には「大伝馬町」が造られ、大きな商家が軒を並べました。初期のころには主に伊勢や近江からの商人が多く、関西地方の商品を扱っていましたが、元禄期(1688～1707年)に入ると全国からあらゆる種類の商品が江戸に流入するようになったのです。大坂が流通商品の供給地、江戸が大消費地という商業と流通の構図が出来ていたと言えます。

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《本の出版と教育・文化の発展～増えた人々の楽しみ》

文化の発展に書物は欠かせないものです。家康公はその礎を築いたことで江戸の文化のカタチを創り上げました。

慶長年間、秀吉が天下を平定し朝鮮への出兵を行ったころ、家康公は木版の活字を使用して、『論語』や『群書治要』をはじめとする漢籍、『日本書紀』、『吾妻鏡』などの書籍を出版させました（伏見版）。しかしこれらは商業目的ではなく、武士たちの教養を高める目的で出版されたものでしたので、部数も100部程度でした。しかし本に親しむことの大切さを家康公自らが示したのです。

江戸では寛永のころには本屋があったと伝えられますが、本屋も時代が下るにつれ、その出版物の内容は多岐に渡りました。当時の本屋は編集、製版、製本に小売まで行いましたが、取扱う書物の内容で「書物問屋」と「地本問屋」の二つに大きく分かれていました。書物問屋は主に学問書を、地本問屋は現代の漫画本に当たる「草双紙」や「人情本」など娯楽系の本を扱い、多くの市井の人々の教養や趣味、娯楽を担ったのです。



木版活字（圓光寺蔵）

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《本当に国を閉ざしていたのか～江戸時代の対外政策の「四つの窓口」》

鎖国は外交と貿易の権限を幕府が制限・管理した政策に他なりません。これは国を閉ざすという意味ではなく、国家の主権で対外関係や貿易を管理することですから、現代でも同様です。家康公は当初は御朱印船貿易を奨励し、むしろ積極的に海外への進出を図ろうとしていました。しかし家光の時代には、ポルトガルやスペインのキリスト教布教に伴う植民地化政策を危惧し、外交・貿易制限に踏み切ったのです。ただ、全く国を閉ざしたのではなく、海外に向けて「四つの窓口」が開かれていました。

・長崎口 ……オランダと中国（明、清）に対して
長崎は幕府の直轄地として幕府の管理で貿易が行われました。オランダの「カピタン＝商館長」を通じ世界の情勢を知る手掛かりとし、西洋の学問も「蘭学」として広まりました。



長崎「出島」を望む

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

・対馬口^{りしちょうせんごく} ……李氏朝鮮国に対して

対馬藩^{つしまはん}の宗氏は中世から対朝鮮の外交、貿易の中継ぎを担ってきました。12 回に及んだ「朝鮮通信使」は家康公の対朝鮮外交の成果として顕彰されています。

・薩摩口^{りゅうきゅう} (琉球口) ……琉球王国に対する窓口

薩摩藩^{さつま}が琉球王国を支配したことで、琉球を通じての貿易が認められました。

・蝦夷口^{まつまえ} ……アイヌ民族に対する窓口

家康公は松前藩の松前氏^{えぞ}に蝦夷地との交易を独占的に認めました。



内藤新宿ジオラマ（江戸東京博物館）

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

3「江戸」と「三河」～その深い関係のカタチ

《江戸の町づくりと三河武士たち》

江戸に入った家康公がまず手掛けたのは、城造りではなく城の拡充工事^{ともな}に伴う町づくりでした。碁盤^{ごばん}の目のような区画整備を行い、城の周辺に武家地・寺社地・町人地を配置しました。町の整備事業のなかでも重視されたのが、物資を運ぶために海から江戸城をつなぐ水路＝道三堀^{どうさんぼり}（現在の大手町あたり）の開削^{かいさく}です。この道三堀に沿って、最初の町である材木町・船町などが成立しました。寛永年間頃までに、約 300 町が創設されたと言われています。この町づくりを主導したのが江戸町奉行であった青山忠成と内藤清成^{あおやまただなり ないとう}でした。

青山忠成が家康^{とも}の供をした際に、現代の赤坂から渋谷に至る広大な土地を拝領^{はいりやう}し屋敷地としました。それが現在の「青山」です。また内藤清成も同じように現在の新宿御苑を含む広大な土地を拝領しました。後にこの地内に甲州街道を接続し新たな宿場を創設したことから「内藤新宿」と呼ばれるようになります（現在の新宿）。いずれも三河武士の名前がそのまま地名となっています。さらに服部半蔵正成^{はっとりはんぞうまさなり}が守った江戸城の門が「半蔵門」、大久保家の鉄砲百人組の屋敷のあった場所を「大久保百人町」と呼ぶなど、東京には各所に三河武士たちの足跡^{そくせき}が残されているのです。

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《江戸に移った三河商人たちの足跡～多くの「三河屋」》

家康公は町づくりの過程で「五街道」の整備も精力的に行い、様々な物資の流通を円滑にしました。そしてその五街道の起点を定めました。それが「日本橋」です。日本橋の町割りでは大伝馬町・中伝馬町・小伝馬町を造成して商家を誘致しました。この時には関西からの物資を商う伊勢商人や近江商人たちが軒を運ね、大消費地としての町の基本が出来上がっていったのです。

元禄期に入ると取扱商品別の組合ができ、様々な種類の商品が江戸に流入するようになりました。その中でも、特に「味噌」、「醤油」等を扱っていた組合には醸造業の盛んな三河出身者が多かったため、「三河」の入った看板を掲げる者が多かったと伝えられます。以後、「三河屋」は江戸中のみならず全国的に醸造関係の商いを営む一般的な屋号として、最近まで使われてきました。漫画「サザエさん」に登場する酒屋さんも「三河屋」です。また、三河の酒は特に品質が優れているということで、「三河酒」も一つのブランドだったようです。



八丁味噌蔵

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《江戸で好まれた「三河の物産」》

全国各地で特産品の生産が奨励され、江戸市中に流入することによって地域の代名詞となるような「名産品」がもてはやされるようになったのも、家康公の目指した平和社会の一つのカタチです。これは現代でも同様であり、地方創生の一つのカギにもなっています。

岡崎を中心とする三河地方の物産は、家康公の江戸入封と同時に多くの物品が持ち込まれたと考えられます。有名なものは「豆味噌」や「木綿」などで、八丁味噌は江戸では「三河味噌」とか「三州味噌」の名称で好まれていた様子が史料から散見できます。また、木綿は古くから「三河木綿」として生産され、「三河縞木綿」は普段着として、「三河白木綿」は前掛けや法被、帯芯などとして江戸で大量に取引されたと伝わります。

他にも灯笼を中心とした「石製品」、家康公が三河の鉄砲隊の火薬の平和利用として製造を許したと伝わる稲富流火術をもとにした「三河花火」などは忘れてはならない特産品と言えるでしょう。

さらに東海道中で非常に人気の高かった「淡雪豆腐」や「鮎の煮びたし」なども名産品として喜ばれたようです。



石都岡崎の石製品

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカケテ

4 全国に広がった三河武士たちの町づくり

家康公の天下平定に伴い、家臣であった三河武士たちもその多くが大名やその家臣として全国各地に移封されました。以後、全く争いのない時代が創られたことから、彼らの腰を落着けた町づくりが行われました。全国におよそ280藩ほどの大名家がありましたが、そのうち三河武士たちの親藩・譜代の大名家は120余り、東北から九州に至るまで、岡崎をふるさとする武士たちによる町づくりが各地で進められたのです。

《本多忠勝による町づくりがなされた大多喜と桑名》



↑ 大多喜城
(千葉県大多喜町)



← 本多忠勝銅像



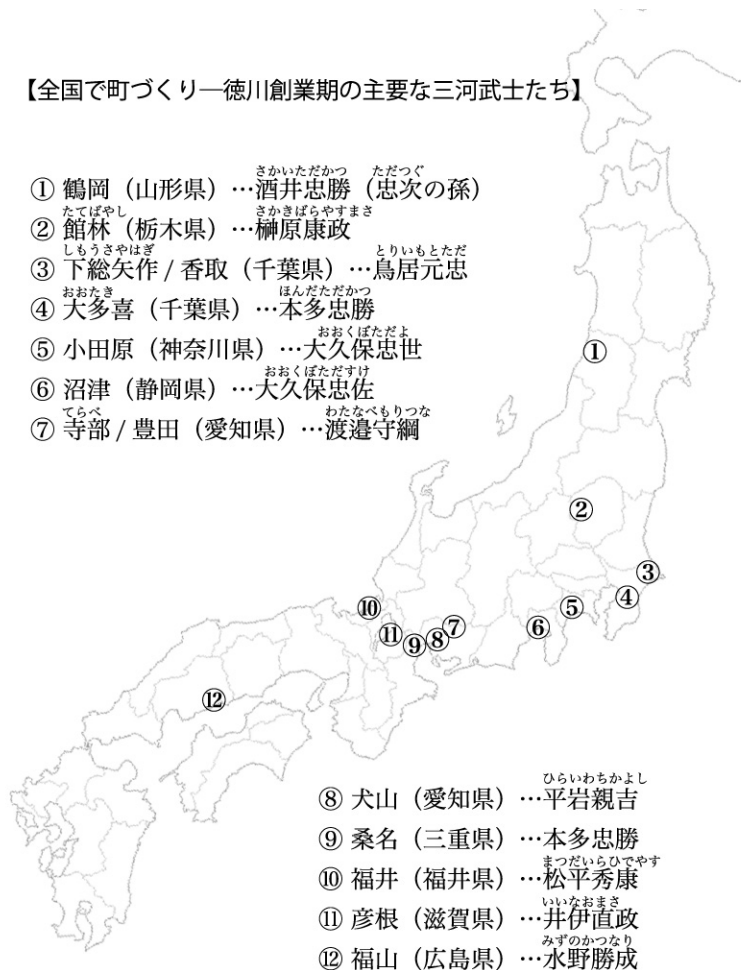
桑名城跡→

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカケテ

【全国で町づくりー徳川創業期の主要な三河武士たち】

- ① 鶴岡 (山形県) …酒井忠勝 (忠次の孫)
- ② 館林 (栃木県) …榊原康政
- ③ 下総矢作 / 香取 (千葉県) …鳥居元忠
- ④ 大多喜 (千葉県) …本多忠勝
- ⑤ 小田原 (神奈川県) …大久保忠世
- ⑥ 沼津 (静岡県) …大久保忠佐
- ⑦ 寺部 / 豊田 (愛知県) …渡邊守綱



- ⑧ 犬山 (愛知県) …平岩親吉
- ⑨ 桑名 (三重県) …本多忠勝
- ⑩ 福井 (福井県) …松平秀康
- ⑪ 彦根 (滋賀県) …井伊直政
- ⑫ 福山 (広島県) …水野勝成

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

5 主な三河武士たちの生誕地

- ・青山忠成（岡崎市^{どうど}百々町）老中、常陸江戸崎藩主
- ・阿部氏（岡崎市^{こぼり}小針町）子孫は安芸福山藩主他
- ・安藤直次（岡崎市^{だいわ}大和町）紀伊家付家老、田辺城主
- ・板倉勝重（岡崎市小美町）京都所司代
- ・植村氏明（岡崎市東本郷町）子孫は^{やまと}大和高取藩主
- ・大久保忠佐（岡崎市上和田町）沼津藩主
- ・大久保忠世（岡崎市上和田町）小田原藩主
- ・高力清長（幸田町高力）三河三奉行、武威岩槻藩主
- ・酒井忠次（岡崎市井田町）徳川四天王、子孫は鶴岡藩主
- ・榊原康政（豊田市上郷町）徳川四天王、館林藩主
- ・高木清秀（岡崎市東牧内町）子の代に河内丹南藩主
- ・土井利勝（岡崎市土井町）大老、下総古河藩主他
- ・鳥居元忠（岡崎市渡町）下総矢作藩主
- ・平岩親吉（幸田町坂崎）犬山藩主
- ・本多重次（岡崎市宮地町）三河三奉行
- ・本多忠勝（岡崎市西蔵前町）徳川四天王、桑名藩主他
- ・本多広孝（岡崎市土井町）上野白井城主
- ・渡邊守綱（岡崎市正名町）尾張家付家老、三河寺部城主

⋮



徳川十六将図（法藏寺）

4. 江戸日本

家康公の創った江戸のカタチ

《三河武士たちの生誕地碑》



板倉勝重生誕地碑（岡崎市小美町）



植村氏明生誕地碑



大久保一族発跡地碑



酒井忠次生誕地「井田城址」



榊原康政生誕地碑



鳥居氏発祥地石碑



本多重次生誕地碑



本多忠勝生誕碑

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

1 主な古戦場

《小豆坂古戦場》(岡崎市羽根町小豆坂)

今川義元・松平広忠連合軍と、尾張から^{しんこう}侵攻してきた織田信秀との間で天文 11 年(1542 年)と 17 年(1548 年)の 2 度にわたって繰り広げられました。松平清康の死後、^{はけん}勢力の衰えた松平氏に代わる西三河地方の覇権を巡って生じた織田と今川との抗争であり、桶狭間の戦いの^{ぜんしやうせん}前哨戦とも言えます。

《大樹寺の陣》(岡崎市鴨田町広元)

永禄 3 年(1560)に起きた桶狭間の合戦の結果、岡崎の大樹寺に退却した家康公を守るために、織田方の^{ぞうひやう}雑兵と大樹寺の僧たちの間で起きた戦い。僧たちの中でもひととき大きく 70 人力といわれる^{そどうおしやう}祖洞和尚が、^{かんぬき}総門の門を振りかざして戦い、敵の雑兵たちを追い払ったという伝承があり、大樹寺には家康公の命でその門を祀った「貫木神」^{かんぬきしん}が安置されています。さらにこの戦いで命を失った僧たちを^{ほうむ}葬りその^{たまら}霊を弔うために、付近の^{さいこうじ}西光寺(鴨田町向山)に「大衆塚」と「阿弥陀如来石像」(市指定文化財)が建てられました。

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

《三河一向一揆》

永禄 6 年(1563)、元康から名を松平家康と改めたその直後に勃発した浄土真宗本願寺派門徒による一揆。佐々木の上宮寺(岡崎市上佐々木町)が発火点となり(安城市野寺の本證寺説もあり)、瞬く間に西三河全域に広がってしまいました。岡崎市域では、家康公が本陣を置いた^{くわこ}桑子の^{みやう}妙源寺(岡崎市大和町)と門徒側の上宮寺周辺、針崎の勝鬘寺(岡崎市針崎町)の門徒宗が大久保一族と戦った上和田^{かみわだ}砦^{とりで}周辺(岡崎市上和田町「大久保一族発跡地碑」)、家康公によって焼き払われた土呂本宗寺付近(岡崎市福岡町 / 現在は土呂八幡宮)、最後の激戦地となった馬頭原(岡崎市美合町付近)などが戦いの^{あと}跡として挙げられます。最終的には上和田の^{じやうじゆいん}淨珠院で家康公と門徒側の^{わばくこうしやう}和睦交渉が行われ、一揆はおおよそ半年で収束しました。



小豆坂古戦場碑



「土呂八幡宮」
一揆後に再建。
この場所に
「土呂御坊」があり
一揆の中心となった。



大衆塚(西光寺)

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

2 家康公に関わる主な寺社

いがはちまんぐう

伊賀八幡宮

岡崎市伊賀町東郷中86



武運長久を祈願する松平家の氏神であり、家康公も初陣の参詣を吉例に、たびたび必勝祈願に訪れたといわれます。桶狭間からの退却途中、矢作川が渡れず困っていた家康公を伊賀八幡宮の使いの鹿が対岸に導いたという「三鹿の渡し」伝説が残ります。社殿や随神門、蓮池にかかる石橋など国の重要文化財多数。
文明2年（1470）松平四代 親忠 創建。

だいじゅじ

大樹寺

岡崎市鴨田町広元5-1



桶狭間から退却した家康公が先祖の墓前で自決しようとした際、住職の登岸上人から「厭離穢土 欣求浄土」の言葉を授かり平和国家建設を決意した立志の地。松平家・徳川家の菩提寺で、松平八代の墓や歴代将軍の等身大の位牌が並びます。多宝塔は国の重要文化財。
文明7年（1475）松平四代 親忠 開基。

ろくしょじんじゃ

六所神社

岡崎市明大寺町耳取44



三十七代 齊明天皇の勅願により、奥州鹽竈大明神を勧請して創建。家康公の産土神として代々徳川家の崇敬篤く、三代将軍 家光公や四代 家綱公により整備された本殿・幣殿・拝殿・楼門などは国の重要文化財に指定されています。

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

たつきじんじや

龍城神社

岡崎市康生町561



江戸時代、岡崎城内に祀られていた岡崎東照宮と本多忠勝公を祀る映世神社が明治になり合祀され、岡崎城の別名である龍ヶ城より龍城神社に改称。岡崎の春を彩る家康行列は龍城神社の例祭（岡崎藩本多家の行軍参拝）に由来しています。

たきさんとしょうぐう

瀧山東照宮

岡崎市滝町山籠107



徳川三代将軍 家光公により創建。日光、久能山とともに日本三東照宮のひとつに数えられ、東照大権現となられた家康公を祀っています。本殿・拝殿・幣殿・中門・鳥居などが国の重要文化財に指定されています。源 頼朝が大伽藍を、足利義氏が本堂を建立するなど源氏との関わりが深い瀧山寺境内に造営されました。

しょうおうじ

松應寺

岡崎市松本町42



桶狭間合戦の後に岡崎へ入城した家康公は、父 広忠公の菩提を弔うため寺を建立し、かつて人質時代の自分が松平家の繁栄を祈って父の墓上に植えた小松が茂っていることを喜び、「我が祈念に^{ひょうしよ}（應）じた松」から寺号を松應寺と名付けたといわれます。広忠公廟所は本堂の裏手へ。

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

ずいねんじ

随念寺

岡崎市門前町91-1



永禄5年(1562)、崇敬する祖父 松平七代 清康公とその妹・久子の菩提を弔うため家康公が創建。久子は、母・於大と生き別れた幼い家康公(竹千代)を人質に出される6歳頃まで養育した人物です。東海道が見渡せ、岡崎城の防衛拠点としての名残りも感じられます。

ほうざうじ

法蔵寺

岡崎市本宿町寺山1



家康公が幼少時、読み書きを習った寺と云われ、^{すずり}硯箱・硯石・手本・机・墨付小袖など当時の品が数多く残ります。境内には東照権現宮や家康公ゆかりの草紙かけ松などの文化財も多く、三方ヶ原で戦死した三河武士たちの供養塔群が静かに佇んでいます。

てんおんじ

天恩寺

岡崎市片寄町山下59



貞治元年(1362)足利義満が建立。家康公が長篠に出陣の折り、境内の大杉の辺りで本尊の延命地蔵の靈感で危うく武田の刺客からの難を逃れることができ、馬上から何度も杉の木を見返ったという「見返りの大杉伝説」が残ります。仏殿と山門は国の重要文化財。

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

3 江戸時代の岡崎遺産

《ビスタライン》

「岡崎城」と岡崎城の北にある「大樹寺」を結ぶ約3kmの直線を「ビスタライン」と呼んでいます。「ビスタ」とは「眺望・展望」を意味します。

この眺望は、徳川三代将軍 家光が、家康公の十七回忌を機に、徳川家・松平氏の菩提寺である大樹寺の伽藍を建てるとき、「祖父生誕の地を望めるように」と、本堂から三門、総門を通して、岡崎城が望めるようにしたことに由来します。以後、歴代の岡崎城主は、天守閣から毎日ここに向かって拝礼したとも伝えられています。三門越しに望む岡崎城は、まるで額の中の絵のようです。



ビスタライン

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

《菅生神社花火大会》

永禄9年（1566）2月12日、25歳の家康公は菅生神社で厄除け・開運を祈願し、この年、朝廷より三河守に任じられ、徳川復姓が許されました。以来、同社は歴代岡崎城主の崇敬も篤く、城内鎮守の守護神として祈願所となっていました。

菅生祭は、厄災の除去を祈願したお祭りで、江戸時代、文化・文政の頃（1804～1840）から、岡崎城の前を流れる菅生川に提灯を付けた鉾船を浮かべ、金魚花火や手筒花火等を打ち上げ奉納していました。現在は岡崎市の花火大会と共催で、8月の第1土曜日に「菅生祭鉾船神事」が執り行われます。



菅生神社 花火大会

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

《藤川の旧東海道と宿場町》

藤川宿は、東海道の前身である鎌倉街道の時代から交通の要衝とされてきました。藤川宿の名物はむらさき麦と藤の花で、その美しさは「ここも三河 むらさき麦のかきつばた」という松尾芭蕉の句にも詠まれています（句碑は十王堂境内にあります）。宿場町への出入り口を示す東西の棒鼻（宿場の境界を示す棒）が再現され、また脇本陣門、本陣石垣や家並み、松並木など当時の景観が残されています。脇本陣跡には藤川宿資料館があり藤川宿の町並みが模型で再現されています。

平成8年（1996年）には国土交通省による「歴史国道」の選定を受けています（愛知県唯一の選定）。



藤川宿棒鼻

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

《岡崎の城下町と宿場町》

岡崎は家康公生誕の城下町です。しかし、この町を飛躍的に変え、現在の岡崎市の町割りの元をつくったのは秀吉家臣の田中吉政でした。吉政は家康公の江戸入りの後に岡崎城主となり、徳川の攻撃に備え城下を拡張整備したのです。特に東海道を城下町に引き入れ、「岡崎二十七曲」と呼ばれる屈折の多い道筋としました。これは城下防衛とともに、街道筋に店舗を並べ旅人たちを滞留させる経済効果ももたらしました。

また岡崎は、矢作川の水運や奥三河からの物資集積で栄えた、東海道有数の規模を誇る宿場町でもありました。宿場町は初代岡崎藩主であった本多康重によって整備され、その後、水野氏が藩主の時代には、城下と宿場町の東西の境にそれぞれ「籠田惣門」「松葉惣門」が建てられました。現在も二十七曲の要所に道標や石碑が残され、周辺には寺社も多く点在しています。

街道の整備に伴い、人々の往来を阻害していた矢作川に慶長6年(1601)、初めて土橋が架けられ、寛永11年(1634)三代将軍家光の上洛を機に、長さ208間の板橋に架け替えられた矢作橋は江戸期を通じて日本一の長さを誇り、多くの浮世絵に東海道の観光名所として描かれました。

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

岡崎城主の変遷

享禄3 (1530)	松平清康	～天文4 (1535) 岡崎城を松平家の本城に。「岡崎開府」
天文6 (1537)	松平広忠	～天文18 (1549) 死後、今川氏による領地支配が行われる。
永禄3 (1560)	松平元康	この時代に徳川家康と改名
元亀元 (1570)	松平信康	～天正7 (1579) 自刃。 以後は城代(石川数正、本多重次)
天正18 (1590)	田中吉政	～慶長5 (1600) 岡崎城下町の整備。東海道を城下に引き入れ屈折の多い「二十七曲」の形成
慶長6 (1601)	本多康重 : :	岡崎初代藩主。宿場町の整備を進める。4代続く(前本多家) ※本多広孝の長男
正保2 (1646)	水野忠善 : : :	水野時代が7代続く。籠田惣門、松葉惣門、御馳走屋敷の建設
宝暦12 (1762)	松平康福	一代だけで石見国に転封
明和6 (1769)	本多忠康 : : :	～明治4 (1871) まで6代続く(後本多家)。映世神社勧請 ※本多忠勝の子孫

5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

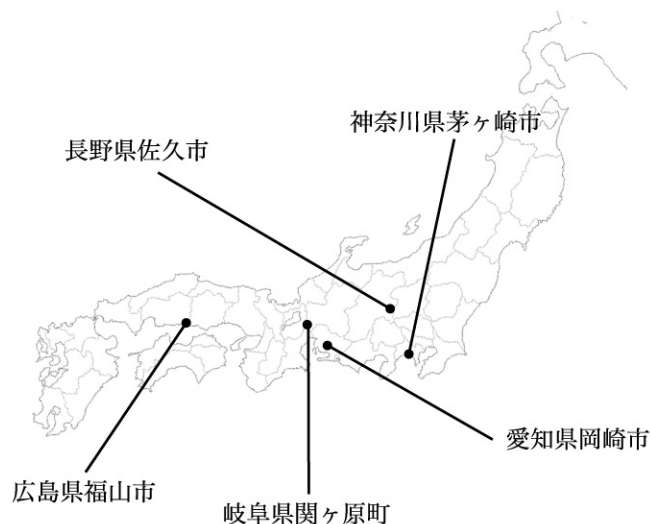
4 家康公に関わる岡崎市の親善都市、ゆかりの町

《親善都市》

「広島県福山市」
ふくやまし

福山市と岡崎市は、

1. 市制施行日が同じである
 2. 面積・人口がほぼ等しい
 3. 徳川家康公と福山城主 水野勝成公が従兄弟である
- など類似点が多いことから、昭和 46 年 9 月、議会において提携を議決しました。



5. 岡崎遺産

岡崎に残される家康公の足跡

《ゆかりの町》

「神奈川県茅ヶ崎市」
ちがさし
おおおかえちぎんのかみただすけ

大岡越前守忠相の関係からです。大岡家はもともと三河の出身で家康公に仕えており、関東移封に伴い現茅ヶ崎市堤に知行地を与えられていました。五代 忠相が八代將軍 吉宗よしむねの厚い信任を受け、岡崎にも知行地を得て、茅ヶ崎と合わせて 1 万石の大名となったことから提携をしました。

陣屋じんや（城を持たない大名たちの政庁が置かれた屋敷）は西大平（現岡崎市大平町）に置かれ、西大平藩にしおおひらはんと称しました。

「長野県佐久市」
さくし

江戸時代末期の文久 3 年（1863）、第十一代奥殿藩主 松平乗謨公おんきの（後の大給 恒おぎゆうゆずる 日本赤十字社創設者の一人）が、奥殿（岡崎市奥殿町）にあった陣屋を信州佐久 1 万 2 千石の中心地、田野口（旧白田町田口）に移し、龍岡藩主となった縁によるものです。

「岐阜県関ヶ原町」
せきがはらちょう

家康公が関ヶ原での戦いを機に、徳川 265 年の泰平の世を築いた縁で、昭和 58 年 7 月に「ゆかりのまち」提携をしました。

6. 家康公生誕のまち、岡崎

おわりに

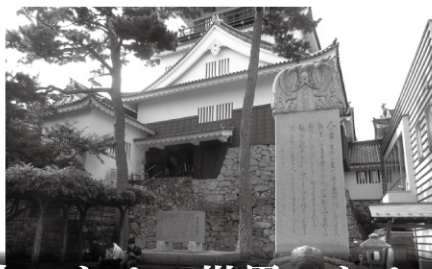
1 家康公に学ぶ — 未来へのメッセージ

岡崎城天守閣前に立つと、志^{こころざし}の気が深まります。

人間、徳川家康公に学ぶなら、ここ。

家康公遺訓は私たちに人生訓のすべてを語りかけ、東照公遺言は限りある命と受け継ぐべき人間社会の宿命を感じさせます。

山岡荘八氏文学碑は、あの時代に立って家康公の生涯を俯瞰^{ふかん}し、この国のあり方を「菊と葵」に象徴させています。
「神州の 大気ぞ菊に 添^そう葵」



家康公遺訓

日本のため、世界のため、
未来に遺す言葉がここにあります。



東照公遺言



山岡荘八文学碑

6. 家康公生誕のまち、岡崎

おわりに

2 家康公検定ファイナル まとめ

平成 22 年、23 年、24 年の岡崎家康公検定。平成 25 年、26 年、27 年の岡崎・浜松・静岡、三市連携の家康公検定。6 年 600 問を、有意の皆様と家康公に学んできました。

求め続けたのは、家康公の人間思想、平和という概念。人類が学ぶべき人間、世界が学ぶべき社会、がありました。

ここ岡崎は、その家康公生誕のまち。

ここから試練を超えた覚悟と学びの生き方が「江戸日本」を築いてゆきました。

その江戸時代も明治の国づくりの陰に隠れ、しかし、江戸発祥の岡崎は誇りを失わず、いち早く、地道に、新たな近代化に取り組みました。

明治から 48 年後、全国 67 番目の市制を施行し、近隣の市町村からは憧れの岡崎王国を取り戻しました。

この副読本の表紙に描かれたのは、この町で志を立てた 25 歳の若き家康公が、矢作橋に帰って再生岡崎を望む風景。市制施行の大正 5 年、左に懐かしい大樹寺を見、右には近代工場が建ち、経済要^{かなめ}の銀行と町並みが見えます。時が流れ、空襲で焦土となるも復興して岡崎城天守閣が蘇^{よみがえ}り、昨年は家康公 400 年祭を挙^あ行。菅生川には泰平を祈る灯りが浮び、夜空に「厭離穢土・欣求浄土」の花火が大輪を開いています。

しかし今も、世界は戦場。

岡崎こそ、戦国乱世から泰平国家への道のりの原点。

この町で人々は学び次代を創り出してほしいと願います。